

リアリティを追求する作品に 大河ドラマ「青天を衝け」 美術プロデューサー・佐藤綾子さん

大河ドラマ「青天を衝(つ)け」の美術プロデューサーを務める佐藤綾子さん。ロケセットから衣装・メイク、持ち道具など美術班を束ねる佐藤さんは、今作品について「様々な登場人物の物語が同時並行で進む。内容が盛り沢山だからこそ、出演者の皆様が役柄に馴染んでもらえるよう、リアリティを追求したい」と意気込む。各場面でのエピソードや制作の裏話などを聞いた。

(森本勝利)

「血洗島・青春編」は、来事です。物語で度々登場する約1300本の桑の木は、東京や群馬から移植して育てました。まさにスタッフの汗と涙の結晶です。

武蔵国血洗島村は、利根川に囲まれた自然豊かな場所。農家の暮らしや血洗島の文化などに思いを巡らせてつづつ、演出の黒崎(博)さんから「空気を大事に」という意図を伝えられていました。

いざ安中市の候補地に行き、目の前に見えたのが、まるで絵画のような雰囲気。たたずむ一本の「コナラの木」(作品では「ひこばえの木」)。満場一致で撮影地が決まり、この大木ありきで場面を考えていくことになりました。

「中の家」の前に広がる畑は、地元の方々の協力を得ながら、一から耕しました。大河でもかなり稀な出

「セツトで特にこだわった部分はありますか。」

江戸セットで意識したのは、人混みと情報量。現代でも地方から上京して思う感覚と、あまり違いがないように思います。血洗島の広大な敷地とは違い、例えば提灯一つ入るスペースが

あれば敷き詰めるなど、とにかく隙間を埋めることを念頭に置いていました。

藍玉の製造・販売に携わる栄一が訪れた江戸の紺屋町は、柄の入った藍染の反物を飾ることで華やかさを表現。一方で京都の街並みは、赤色などの明るい色味を中心に表現することで、色彩豊かな雰囲気を出しました。

「パリ編」ではVFX(視覚効果)の技が光る演出が数多く登場しました。コロナ禍で渡仏してのロケができない状況の中、現地クルーが撮影した映像と最新技術を組み合わせ、作品を仕上げられています。日本ではグリーンバックに囲まれたセットで演技をしてもいい、編集者が実際の画を起す。三位一体の関係でシーンを作るのは初めての経験で、技術が進んでいるなど改めて感じました。

役者の方々に、江戸時代の人がパリに行く感情に近づいてもらおうと、持ち道具には特にこだわりました。例えば書物を読み書きするための「文机」を背負い乗船したりと、各キャラクターに合った荷物を準備。人物の気持ちになってもら

うことも、美術班には求められています。

「時代に翻弄されながら懸命に生きる沢沢栄一の『暮らした』を、衣装でどう表現していますか。」

衣装デザインを担当する黒澤和子さんから「幕末を色味で表現することは難しい」とお話しをいただいた中で、栄一にとっての最大の変化といえば「まげを落としたこと」。和装から断髪洋装の姿になっても、「藍色」へのこだわりは貫こうと思っています。

栄一にとって血洗島での暮らしを通して商才を磨いたことは、間違いなく原点。その熱き心を衣装で表現しようとして、各場面でも藍色を取り入れていきます。物語が進んでも、そのニュアンスは続けていきます。

「佐藤さんが考える沢沢栄一像を教えてください。」

パリに渡り、それまで武士の象徴だった「まげ」を落とす。当時の日本だったらあり得ないことを平然とやり遂げる、沢沢栄一の「順応性」に感心しました。

この作品に関わる前に読んだ本で「血洗島村に暮らす人々は、明治の早い段階で断髪姿になった独特な場

所」ということが書かれていました。作品に関わる中で、栄一の影響だということとは容易に想像がつかない。それだけ地域にとって影響力のある人物だったし、先進的な考えを持ち合わせていたと思います。

「最後に新聞記者・埼玉県民に向けてメッセージをお願いします。」

美術面では衣装はもちろん、顔周りにも注目してほしいです。例えば人物のひげは、動物のヤクの毛を加えて、一本ずつ丁寧に加工して、一本ずつ丁寧に仕上げられています。テレビの高画質化で、美術班の技術革新も進んでいます。

そのようなことを頭の片隅に置いていただきながら、大河ドラマ「青天を衝け」を存分にお楽しみください。

「ありがとうございます。」

「ありがとうございます。」

「ありがとうございます。」

「ありがとうございます。」

「ありがとうございます。」

「ありがとうございます。」



大河ドラマ「青天を衝け」で美術プロデューサーを務める佐藤綾子さん=8月4日、都内(栗原祥光撮影)

佐藤綾子(さとうあやこ) 1995年NHKアート入社。Eテレ語学番組の美術進行を担当後、ドラマ担当班に異動、現在に至る。美術制作進行のチーフである美術プロデューサーとして初参加した作品は連続テレビ小説「まれ」(2015年)。近年では大河ドラマ「おんな城主 直虎」(17年)、大河ドラマ「いだてん〜東京オリムピック騒ぎ〜」(19年)など、趣味はマンガ投稿。



栄一が訪れた江戸の紺屋町は、様々な柄があらわられた藍染の反物が並び、華やかな雰囲気を演出した(NHK提供)



群馬県安中市でのロケハンの様子。「コナラの木」が「血洗島・青春編」のオープンセット建設の決め手となった=2020年1月(NHKアート提供)



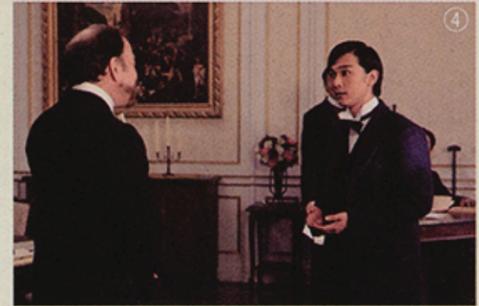
文机を背負いパリに渡った吉沢亮さん演じる沢沢栄一(栄一)=第22回「篤太夫、パリへ」より(NHK提供)



(上)「パリ編」の多くは全面グリーンバックの中で撮影(下)VFXの技術を使い完成したナポレオン三世への謁見シーン(NHK提供)

沢沢栄一 衣装の変遷

- ①血洗島村時代の栄一。沢沢家が藍玉の製造・販売を手掛けていたことから、藍染め風の着物をまとい、好奇心旺盛な青年期を描いた=第4回「栄一、怒る」より(NHK提供)
- ②一橋家家臣となった栄一。明るい色の羽織りは、武士らしく気取りたいという思いで、喜作と一緒に古着屋で買ったという設定=第15回「篤太夫、薩摩潜入」より(NHK提供)
- ③武士の正装である袴を着る栄一。江戸城にあがる際、家臣は略礼装として黒羽織を羽織るが、さらにかしこまった場では袴を着用した。袴は大政奉還以降、着られなくなる=第20回「篤太夫、青天の霹靂」より(NHK提供)
- ④パリにわたり、断髪洋装の姿になった栄一。19世紀後半のヨーロッパでは、今でいう「フロックコート」の形が主流だった=第23回「篤太夫と最後の将軍」より(NHK提供)





大河ドラマの撮影で使用した着物。左が渋沢栄一、右が渋沢喜作の一橋家仕官後の着物

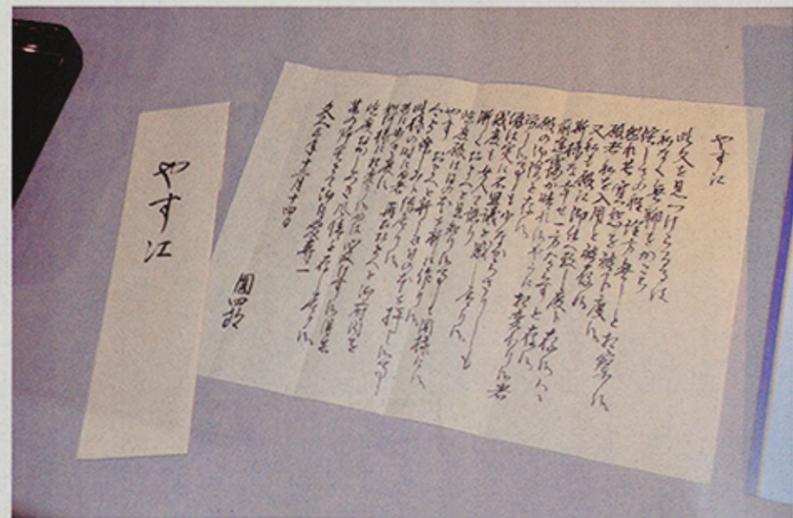
現在の展示の目玉は、栄一が徳川昭武のお供として訪れた1867年のパリ万博の会場にあった水圧式エレベーターの再現

セツトだ。栄一が異国の進んだ文明に直面し、圧倒的な技術に驚く象徴的なものとして、エレベーターを選んだという。

栄一の驚き体感

エレベーターの内部は4畳半ほどで、四隅に柱、側面に網目のような枠がある。一見して金属製に見えるが、実は木製で塗装などで重厚感を醸し出している。映像デザイナーの荒川靖彦さんの解説によると、「表現したかったのは金属感」という。江戸時代の日本は木の建物の中

心だったのに対し、欧米は金属や石の建造物。日本にはなかった素材感を表しているそうだ。そのほか、栄一と渋沢喜作が一橋家に仕官したころに着ていた撮影用品の着物も展示。小道具の中には、栄一の恩人・平岡四郎が江戸を発つ前に妻・やすにあてた手紙もある。円

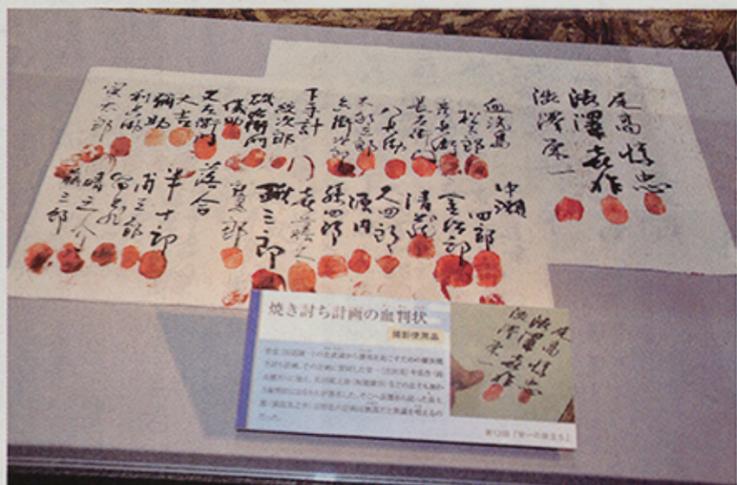


大河ドラマの撮影で使用した平岡四郎から妻・やすにあてた手紙

四郎は京で非業の死を遂げるが、円四郎役の堤真一さんと、やす役の木村佳乃さんの名演が目につかひ、涙を誘った。物語や撮影の裏話を紹介する映像は、栄一と喜作が故郷の血洗島を出て一橋家の家臣となるドラマ中盤を中心に紹介している。また、番組冒頭で北大路欣也さんが演じる徳川家康コーナリーの裏話を紹介する映像もあり、ファン必見だ。

栄一の故郷・血洗島の渋沢家のセツトや、撮影で使用した獅子舞の獅子頭、出演者のサイン色紙なども引き続き展示している。

これからドラマは明治維新へ。激動の展開を経て、栄一は大実業家への道を歩み出す。ドラマの感動を思い出しながら、大河ドラマ館で「青天を衝け」の世界を120%味わってみて



撮影用に再現された横浜の外国人居留地の焼き討ち計画の血判状

大河ドラマ館

「日本資本主義の父」渋沢栄一の生涯を描いたNHK大河ドラマ「青天を衝け」の物語は、いよいよ後半へと差し掛かる。

栄一の故郷の深谷市に開設されている「渋沢栄一 青天を衝け 深谷大河ドラマ館」では、ドラマ中盤から後半にかけて使用したセツトや小道具も展示に加わり、物語の魅力伝えていく。(米山士郎)

パリ万博エレベーター再現



パリ万博会場の水圧式エレベーターを再現したセツト。深谷市仲町の「渋沢栄一 青天を衝け 深谷大河ドラマ館」



尾高惇忠の書「富岡製糸場行啓の漢詩」の複製品